

感情表出偽装・擬態経験への項目反応理論の適用

井上 弥

(2007年2月28日受理)

A Scale of Emotional Suppression based on Experiences of Masking and Falsifying Emotions

Wataru INOUE

The purpose of this study was to make a scale of emotional suppression tendency. Seventy-six undergraduates (22 males and 54 females) were participated in this study. They were asked their experiences of masking and falsifying their emotions along with display rules. Emotions were anger, disgust, fear, happiness, sadness, and surprise. The two parameters logistic model of the Item Response Theory was applied to calculation of the emotional suppression tendency from the masking or falsifying experience data, assuming that there was a tendency of emotional suppression behind using display rules. The ratio of masking and falsifying experience for each emotion was from .18 to .89. The point biserial correlation coefficients were greater than .31. Calculated discrimination parameters were from .86 to 1.25 and difficulty parameters were from -2.93 to 1.62.

Key words: Emotional suppression, Masking, Falsifying, Display rule

キーワード：感情表出抑制傾向，感情偽装，感情擬態，表示規則

われわれの感情は、ほんとうは自分の自由にならず、社会的場面に応じてつかいわけることが厳しく求められており、微笑みや笑いはそのような社会的感情表現として、微妙かつ的確につかいわけられねばならない(野村, 1996)。また、社会的状況では、われわれは表示規則とよばれる文脈情報、すなわち男であるとか女であるとか、人前であるとか、状況など、文化的もしくは個人的に定められた感情表出の管理の下で表出を行っている(濱・鈴木・濱, 2001)。

このような表情コントロールの方法として、Ekman & Friesen (1975) は、(a) 別の表情を付け加える修飾、(b) 表情の強度を変える調節、(c) 表情そのものを変える偽装の3つをあげている。この中でも、実際の感情と表情とのずれが大きい偽装は、表示規則を理解する上で重要な手がかりを提示すると考えられる。

Ekman & Friesen (1975) は、表情の偽装として、(a) 感じていない感情の表情をする擬態、(b) 感じている感情を表情に表さない中立化、(c) 感じている感情の代わりに感じていない感情の表情をする隠蔽の3つをあげている。第1の擬態では、感情を感じていないのに感情を表す表情を作ることになり、第2の中立化及び第3の隠蔽では、実際に感じている感情があるが、

それを表出することなく、無表情あるいは他の感情を表す表情を作ることになる。すなわち、擬態と中立化・隠蔽では、特定の感情を感じているか否かという大きな違いがみられる。そこで、ここで本研究では、感じている感情を表出しないで別のものにする偽装と感じていない感情を表出する擬態の2つに焦点を当てて、感情偽装について検討していく。

これまで表示規則に関しては、様々な研究がなされてきた。例えば、Gnepp & Hess (1986) は、向社会的な表示規則と自己防衛的な表示規則の物語を作成し、その場面での感情表出の選択及びその理由から、表示規則の発達の変化を検討している。また、Saarni (1979) は、10歳児が表情判断の理由に表示規則を報告することを見いだしている。

また、感情の隠蔽や擬態という観点からは、笑いあるいは微笑みが注目され、いくつかの研究が見られる。一つは、ポジティブな感情に伴う笑いとネガティブな感情の隠蔽に伴う笑いの表情の違いに焦点を当てた研究がある。例えば、Ekman, Friesen, & O'Sullivan (1997) は、楽しいときの笑いの表情とネガティブな感情を隠すときの笑いの表情の違いを、FACS (Facial Action Coding System) を用いて検討している。この他、

FACSを用いた表情の違いの研究では、痛みを感じたときの普通の表情と偽装の表情の違いを検討したものも見られるが(Craig, Hyde, & Patrick, 1997), あくまでも表情の差異に関する検討に留まっている。

これに対し、押見(1999)は、笑いには面白く感じていないのに空笑いする擬態や、悲しみなどの感情を悟られないように笑顔を見せる隠蔽があることを指摘した上で、作り笑い尺度の作成を試みている。その結果、(a) ネガティブな感情を隠蔽することを意図した感情制御の作り笑い、(b) 場の緊張を解消したり場を盛り上げたりする雰囲気操作の作り笑い、(c) 他者の行動をコントロールしようとする行為統制の作り笑いの3つの作り笑いがあること、またこれらの作り笑いが公的自己意識と相関することを見いだしている。さらに、押見(2002)は、公的自己意識の高い者が対人交渉において積極的に作り笑いをするを見いだしている。

宮本(1998)は、表情偽装状況を「偽装者が、被偽装者に誤った信念を抱かせることを目的として、意図的に本当の気持ちを隠して、別の情動を示す表情を作る行為がなされるような状況」と定義し、幼児を対象として偽装された表情の理解を検討し、うれしい、悲しいという感情については、従来の6~7歳以降とされる年齢よりも速く4歳児でも理解することを示している。

偽装ないし擬態する感情にはさまざまなものがあると考えられる。しかし、これまでの研究で用いられてきた感情の種類は少ない。状況操作や場面作成の困難さから、一つの研究内では、喜び、悲しみなどの2、3種類に限定されており、基本感情とされる6つの感情を含めて体系的に扱ったものは数少ない。その一つである中村(1991)の研究では、幸福、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪の6つの感情について、リラックスした、非公式的な、私的な、緊張した、形式的な、公然としたという6つの状況下で、本当の感情を表出するかどうかを尋ねている。

これらの研究は、表示規則が感情や状況によってどのように異なるかに注目した研究、すなわち偽装や擬態が行われる条件あるいは要因を検討したものとして捉えられる。

これに対して、表示規則による感情表出の制御のしやすさといった側面に注目した研究もみられる。例えば、Friedman & Miller-Herringer (1991)は、自己モニタリング尺度得点が高い者ほど他者の前で喜びを表出ないことを見いだしているが、Cornelius (1996)は、この結果を、表示規則に影響されやすい人とそうでない人がいることを示唆するものと考察している。

ACS-90 (Action Control Scale 90; Kuhl, 1994)を用いた研究を概観した青林(2006)は、この尺度が感情制御の上手い人と上手くない人を抽出するものであること、そして、感情制御の上手い行動志向者は、上手くない状態志向者と比べ、非意識的、自動的に否定的な感情を制御していると指摘している。

これらの指摘は、表示規則によって感情表出を偽装したり、擬態したりする経験の背後に、感情表出を抑制する傾向性を仮定することが可能であることを示唆している。しかし、これらの研究は、いずれも自己モニタリングや行動志向といった感情表出とは異なる尺度を用いて、感情表出を抑制する傾向を推定している。表示規則の影響の受けやすさ、あるいは感情抑制の上手さといった特性があるならば、それは感情表出経験に直接反映されると考えることができる。

そこで、本研究では、喜び、悲しみ、嫌悪、怒り、驚き、恐れ6つの基本感情について、感情表出の偽装及び擬態経験を尋ね、その経験パターンに項目反応理論(Item Response Theory)を適用することによって、感情表出抑制傾向を算出することを試みた。また、項目反応理論を適用することによって、各感情表出の偽装及び擬態の特性を明らかにすることも目的とした。

方法

被験者 大学生男子22名、女子54名、合計76名であった。

感情の種類 基本感情とされる喜び、悲しみ、嫌悪、怒り、驚き、恐れ6つの感情を対象とした。

質問項目 喜び、悲しみ、嫌悪、怒り、驚き、恐れ6つの感情それぞれについて、(a) それぞれの感情を感じたときに表出しないように抑制したり、他の感情を表す表情をしたという偽装経験の有無、および(b) 感情を感じていないにもかかわらず、それぞれの感情を表す表情をしたという擬態経験の有無を、「4:よくある」から「1:ほとんどない」の4段階で評定させた。

手続き 授業参加者を対象に質問紙を配布し、一斉調査を行った。

結果および考察

1. 感情表出偽装傾向

感情6種類および偽装・擬態の組合せから成る12の感情表出偽装・擬態経験は、各個人の感情表出抑制傾向に基づくと仮定し、項目反応理論による分析を試みた。「4:よくある」「3:ときどきある」「2:ときどきある」を経験ありとして「1」「1:ほとんどない」

を経験なしとして「0」と再コード化し、各感情表出偽装・擬態項目の通過率および点双列相関係数を示したものがTable 1である。感情偽装では、嫌悪偽装の.89が最も高く、驚きの偽装の.22が最も低くなっていた。これに比べ、感情擬態では、喜び擬態の.68が最も高く、恐れ擬態の.18が最も低くなっていた。12の感情表出偽装・擬態経験の通過率は.10～.90の範囲に収まっていた。また、点双列相関係数も最も小さい悲しみ偽装で.31、次に低い嫌悪偽装で.34となっており、十分な項目弁別力があると考えられる。

この調査では、経験の有無を尋ねており、正解を答えるわけではないので、当て推量母数を仮定する必要性があるとは考えにくい。そこで、全ての経験項目について、識別力と抑制傾向の2つを母数とする2パラメーター・ロジスティック・モデルを適用し、各感情表出偽装・擬態経験項目の項目特性を求めた（計算および作図にはScience Software製のBILOG MG 3.0を用いた）。各感情表出偽装・擬態の項目特性曲線を図示したものがFigure 1である。また、求められた各感情表出偽装・擬態の識別力と抑制傾向値をTable 2に示した。

このTable 2から分かるように、識別力は、最も低い喜びの擬態と怒りの擬態が0.86、次に低い驚きの偽装が0.87となっており、いずれも十分な識別力を持つと思われる。次に、抑制傾向値が低い方から順にみていくと、悲しみの偽装 (-2.93)、嫌悪の偽装 (-2.84)、怒りの偽装 (-2.00)、喜びの擬態 (-1.29)、恐れ偽装 (0.00)、喜びの偽装 (0.27)、驚きの擬態 (0.40)、悲しみの擬態 (0.55)、怒りの擬態 (1.29)、嫌悪の擬態 (1.31)、驚きの偽装 (1.47)、恐れ偽装 (1.62)となっている。悲しみの偽装、嫌悪の偽装、怒りの偽装などは頻繁に経験され、いずれも-2.0以下というきわめて低い抑制傾向値となった。これに対し、怒りの擬態、嫌悪の擬態、驚きの偽装、恐れ偽装などは、あまり経験されず、いずれも1.0以上という高い抑制

傾向値を示していた。

マツモト・工藤 (1996) は、日本人がアメリカ人と比べ、家族や親しい友人といるときに、嫌悪や悲しみを示さないことを指摘しているが、これに対応して悲しみや嫌悪の偽装の抑制傾向値は最も低い値になっていた。また、集団の和を保つために、怒りを感じても微笑みで偽装する表示規則が働く指摘しているが、悲しみや嫌悪に続いて、怒りの偽装と喜びの擬態の抑制傾向値も低くなっていることに対応するものであろう。抑制傾向値が単位正規分布のz値と同じであることを考えれば、悲しみの偽装 (-2.93)、嫌悪の偽装 (-2.84)、怒りの偽装 (-2.00) は、極めて低い抑制傾向値であり、日常的に特に意識することなく、これらの偽装が生じていると思われる。

本研究では、恐れ偽装の抑制傾向値が平均値と等しい0.00であり、日本人の平均的な感情表出抑制傾向があるか否かを識別する感情表出偽装・擬態経験となっている可能性が示された。

さらに、12感情表出偽装・擬態項目全体の情報曲線を示したものがFigure 2である。このFigure 2から分かるように、抑制傾向値が0～1の間の情報力が大きく、0以下とは異なり、1以上では急激に情報量が落ちている。したがって、この12の感情表出偽装・擬態経験をういた場合、抑制傾向が平均より高い0.5前後の測定に適していることが分かる。これは、抑制傾向値が0.00以上の項目には、怒り擬態の1.29までの間に喜び偽装、驚き擬態、悲しみ擬態の経験項目が存在するが、0.00以下の項目は、喜び擬態の-1.29になり、この間の抑制傾向値を持つ経験項目がないことに対応している。

2. 性差

次に、これらの12の感情表出偽装・擬態経験項目を基に、抑制傾向値を被験者ごとに求め、性別の平均値およびt検定の結果を示したものがTable 3である。

Table 1 感情表出偽装・擬態ごとの通過率および点双列相関係数

感情偽装	通過率	点双列相関	感情擬態	通過率	点双列相関
2 嫌悪偽装	.89	0.34	10 喜び擬態	.68	0.42
1 悲しみ偽装	.88	0.31	11 驚き擬態	.41	0.51
3 怒り偽装	.82	0.43	7 悲しみ擬態	.36	0.54
6 恐れ偽装	.47	0.49	9 怒り擬態	.28	0.43
4 喜び偽装	.42	0.50	8 嫌悪擬態	.24	0.46
5 驚き偽装	.22	0.42	12 恐れ擬態	.18	0.44

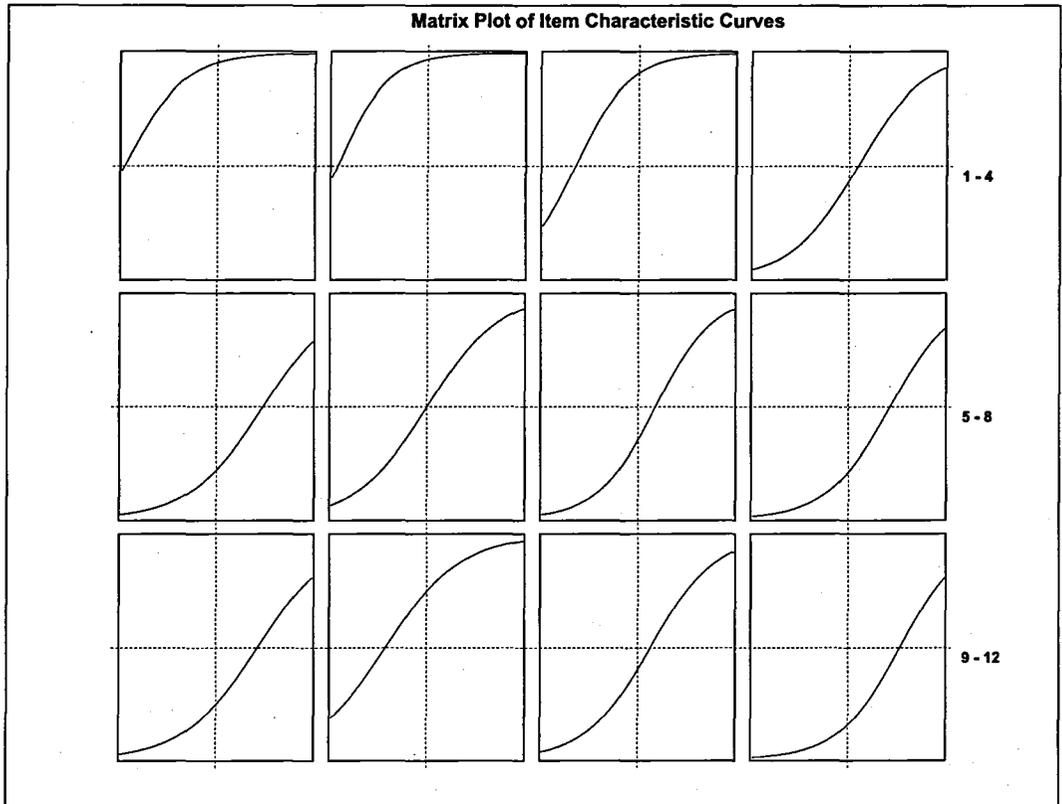


Figure 1 感情表出偽装・擬態ごとの項目反応曲線

(上段, 1: 悲しみ偽装, 2: 嫌悪偽装, 3: 怒り偽装, 4: 喜び偽装, 中段, 5: 驚き偽装, 6: 恐れ偽装, 7: 悲しみ擬態, 8: 嫌悪擬態, 下段, 9: 怒り擬態, 10: 喜び擬態, 11: 驚き擬態, 12: 恐れ擬態)

Table 2 感情表出偽装・擬態ごとの識別力および抑制傾向値

感情偽装・擬態	a (識別力)	b (抑制傾向)
1. 悲しみ偽装	1.07	-2.93
2. 嫌悪偽装	1.25	-2.84
3. 怒り偽装	1.17	-2.00
10. 喜び擬態	0.86	-1.29
6. 恐れ偽装	0.90	0.00
4. 喜び偽装	0.96	0.27
11. 驚き擬態	0.98	0.40
7. 悲しみ擬態	1.10	0.55
9. 怒り擬態	0.86	1.29
8. 嫌悪擬態	1.01	1.31
5. 驚き偽装	0.87	1.47
12. 恐れ擬態	1.04	1.62

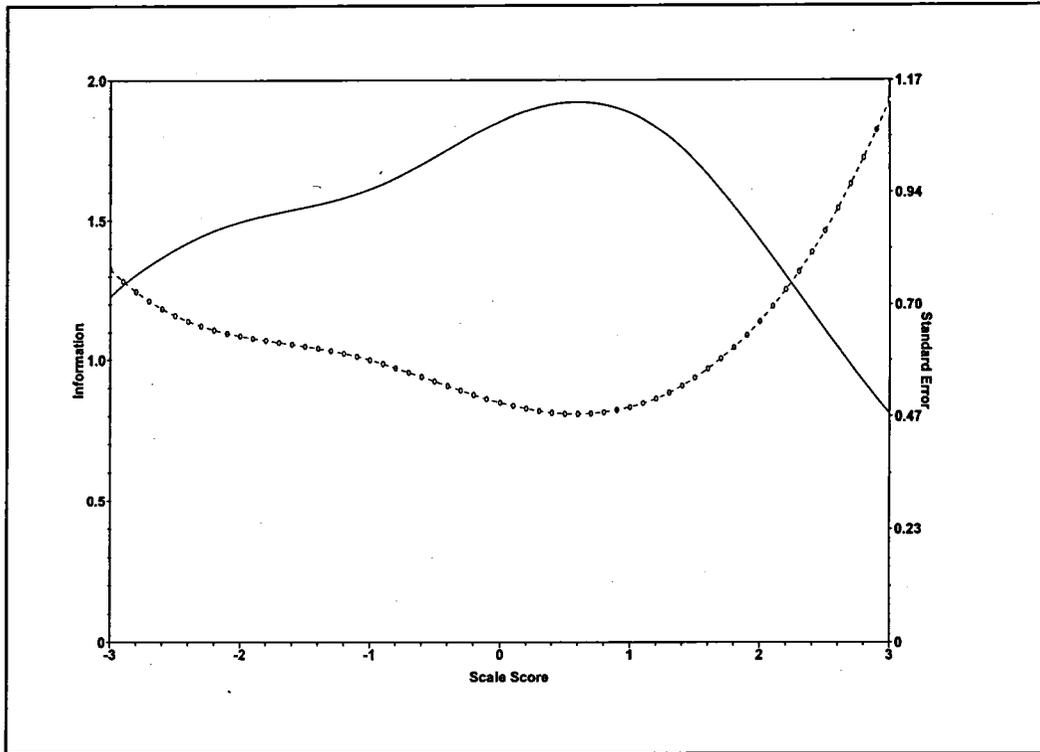


Figure 2 感情表出偽装・擬態経験12項目による情報曲線
(実線が情報量, 破線が標準誤差)

Table 3 感情表出抑制傾向値の性差

	男	女
人数	22	54
平均	-0.16	0.07
標準偏差	0.80	0.82
$t(df=74)$	1.09	

男性 (-0.16)の方が, 平均的抑制傾向値に近い女性 (0.07)よりも抑制傾向の平均値が低く, 感情表出を抑制しない傾向がみられるが, t 検定では有意な性差は見られなかった。

日比野・湯川・小玉・吉田 (2005) は, 従来の研究を整理して, 怒りの喚起には性差がないかしくは女性の方が強い傾向があるが, 男性の方が表出しやすいという性差があること, したがって, 女性の方が効果的な抑制をしていることを指摘している。また, マツモト・工藤 (1996) は, 上司に対する怒りを, 女性で

は泣いて抗議するといった派生感情の表出ないし偽装が認められるのに対し, 男性ではこのような表出はみられず, 部下への八つ当たりといった形で表出されることがあると指摘している。これらの研究からは, 本研究で感情表出の偽装・擬態経験から求めた表出抑制傾向値は女性の方が高いことが期待されたが, 明確な差はみられなかった。

以上のように, 本研究では, 感情の表出偽装と擬態経験を基に, 項目反応理論から感情表出抑制傾向の算出を試みた。感情表出偽装・擬態の特性は, これまで

の研究と対応するところもみられ、さらに、恐れ偽装の経験の有無が平均的な抑制傾向を反映することが示された。

しかし、感情表示規則は本来状況とも密接に関係する概念であるにもかかわらず（例えば、井上，2000 感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果 感情心理学研究，7，25-31.），状況が異なる可能性を無視して偽装・擬態経験が同じ抑制傾向を反映すると仮定したこと，また男女の人数に1対2以上の偏りがあったことなどから，性差を検出するほど精度の高い尺度にならなかった可能性も考えられるであろう。今後は，より多い対象者に対して，状況を考慮に入れた検討が望まれる。

引用文献

- 青林 唯 2006 感情制御，個人差，パーソナリティ
北村英哉・木村 晴（編）感情研究の新展開 ナカニシヤ。pp. 243-261.
- Cornelius, R. R. 1996 *The science of emotion*. New Jersey: Prentice-Hall (コーネリアス R. R. 齊藤 勇（訳）1999 感情の科学—心理学は感情をどこまで理解できたか— 誠信書房).
- Craig, K. D. and Hyde, S. A. and Patrick, C. J. 1997 *Genuine, suppressed, and faked facial behavior during exacerbation of chronic low back pain*. In Ekman, P. and Rosenberg, E. L. (Eds) 1997 *What the face reveals: Basic and applied studies of spontaneous expression using the facial action coding system (FACS)*. Oxford. pp. 161-177.
- Ekman, P. and Friesen, W. V. and O'Sullivan, M. 1997 *Smiles when lying*. In Ekman, P. and Rosenberg, E. L. (Eds) 1997 *What the face reveals: Basic and applied studies of spontaneous expression using the facial action coding system (FACS)*. Oxford. pp.201-216.
- Friedman, H. S. & Miller-Herringer, T. 1991 Nonverbal display of emotion in public and private: Self-monitoring, personality, and expressive cues. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 766-775.
- Gnepp, J. & Hess, D. L. R. 1986 Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, **22**, 103-108.
- 濱 治世・鈴木直人・濱 保久 2001 感情心理学への招待—感情・情緒へのアプローチ—サイエンス社
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 2005 中学生における怒り表出行動とその抑制要因—自己愛と規範の観点から— 心理学研究，**76**, 417-425.
- 井上 弥 2000 感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果 感情心理学研究，**7**, 25-31.
- Kuhl, J. 1994 *Action versus state orientation: Psychometric properties of the action-control-scale (ACS-90)*. In J. Kuhl & J. Beckmann (Eds.) *Volition and personality: Action versus state orientation*. Gottingen: Hogrefe. pp. 47-56.
- マツモト D.・工藤 力 1996 日本人の感情世界—ミステリアスな文化の謎を解く— 誠信書房.
- 中村 真 1991 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則—概念的検討と日米比較調査— 大阪大学人間科学部紀要，**17**, 115-143.
- 野村雅一 1996 身ぶりとしぐさの人類学 中央公論社
- 押見輝男 1999 社会的スキルとしての笑い 立教大学心理学研究，**42**, 31-38.
- 押見輝男 2002 公的自己意識が作り笑いに及ぼす効果 心理学研究，**73**, 251-257.
- Saarni, C. 1979 Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, **15**, 424-429.